

サイヤの王が幻想入り

マジュニアックマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

叛旗を翻しフリーザに立ち向かうも敗れ去ったベジータ王は幻想の地で目を覚ます。
苦手な方はブラウザバックしましょう。

目次

幻想の地

1

幻想の地

「何処だ此処は？」

目覚めた男―ベジータ王三世の目に飛び込んできたのは、見知らぬ天井であった。何故、こんな所で寝ているのであろうか？自分は確か、フリーザに挑み敗れたはずなのに。そう疑問を覚えながら、上体を起こそうとすると激痛が走った。

「グツ！」

うめき声をあげながら、ベジータ王はそれ以上上体を起こすことが出来なかった。しばし、痛みに耐えながらじつとしてみると此処からは見えないが、ドアの開く音が聞こえ誰かが入ってきた。その足音は、ベジータ王へと近づいてきた。ベジータ王がなんとかそちらに顔を向けると、そこには金髪の少女がいた。

「あら、目が覚めたみたいね。大丈夫？」

「貴様、何者だ？」

「私？私はアリス・マーガトロイド。魔法使いね」

「魔法使いだと？そもそも魔法とはなんだ？」

「魔法すら知らないのね。外来人でもそれくらいは知ってると思っただけ、相当の

田舎者ってやつかしら？……それより貴方名前は？」

「この俺を知らないのか？サイヤ人の王、ベジータ王だぞ？」

「サイヤ人？何よそれ」

「まさかサイヤ人すら知らないとは、まあ良い。ところで、貴様、アリスだったか。此処は何処だ。俺はフリーザの宇宙船にいた筈だが？」

「此処は、幻想郷よ」

「幻想郷だと？聞いたこともないな。何故俺をそんな場所に連れてきた？」

「私がやりたくてやったんじゃないわよ。そもそもそんな事できないし」

「なら、誰が自分をこの幻想郷に連れ込んだのだろうか？フリーザたちがそんな事をする必要は無い為、フリーザたちの仕事では無い事は確かか。アリス曰く、そう言うことが出来る存在がいるらしいが、神出鬼没なので滅多に会えないとのこと。

「なら仕方ないか。アリス、此処のことを教える」

「はいはい、私が教えられる事もそんなに多く無いけどね」

アリスの話聞きながら、顔を動かし部屋を見れる限り見渡す。人形が多いが、それ以外は普通の部屋なのだろう。机の上に置いてあるスカウターも発見した。アリスの話聞き終わり、ベジータ王は頭の中で情報をまとめ上げた。

「不思議な世界だ。何かしらの“程度の能力”や“霊力”に“魔力”聞いたことのない

ものばかりだ」

「まあ、そうでしょうね。それより、あなたの事も教えてもらえないかしら」

「良いだろう。貴様はサイヤ人すら知らん様だからな。そこから教えてやろう」

先とは変わり、今度はベジータ王がアリスにサイヤ人について教え始める。流石に想像を超えていたのか、途中からアリスは頭を抑えていた。

「——そして、そのサイヤ人の王こそがこの俺と言うわけだ。……どうした？」

「いや、ちよつととんでもない拾い物しちゃったかなって後悔してる所よ。まあ、今更後悔しても遅いんだけど」

「何を言っているのかわからんが、俺としては他の仲間がどうなったかが気になるどころだ。勇敢な戦士達だったからな。フリーザに一矢位は報いていけば良いが」

フリーザと戦う際に集めたエリートサイヤ人達の顔を思い浮かべながら、ベジータ王はそう呟く。自分と同じく幻想入りしているのか、それとも死んだか、それはわからない。もし、幻想入りしているのならいつか会えるだろう。

「さて、メデイカルマシーンも無いようだからな。俺は眠る事にする。……それと、流石に命を救われたのだ。恩はいつか必ず返す」

「あら、意外と義理堅いのね」

「当然だ。死ねばもう二度と戦いを楽しめないからな」

笑みを浮かべそう言いながら、ベジータ王は眠りについた。